

令和4年度 学校評価

【教育の基本方針】(尼崎市教育振興基本計画)

- 1 未来志向の教育
- 2 個の尊厳や人権の尊重
- 3 家庭・地域社会との連携(子どもの視点に立った教育)

[各校の重点取組について]

よりよい社会の実現に向かって、夢や目標を持ち挑戦する児童の育成

・夢や目標に向かって、最後まであきらめずにやりぬく子 ・思いやりをもった優しい子 ・たくましく健康で強い心を持つ子

学校評価の観点

1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力の育成と健やかな体づくりに取り組む		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
(1) 授業改善の取組を促進するとともに、客観的なデータを踏まえた確かな学力の保証及び縦のつながりを重視した校種間の連携に努める (2) 障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ、様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となる特別支援教育の取組を充実させる (3) 食育を通して生活改善の取組を促進し、健全な心と身体を培い、豊かな人間性の育成を図る (4) 体育・スポーツ活動の取組を促進し、体力・運動能力の向上を図る (5) 積極的にICTを活用し、情報活用能力の育成を図る		3.1	3.5
取組	成果	課題と改善策	
(1)「子どもたちに着けたい資質能力」を明確にして、総合的な学習の時間を核として他教科を関連させた単元開発と授業づくりに取り組んだ。 (2)学校全体でインクルーシブ教育システムの構築とユニバーサルデザイン化に取り組んだ。 (4)「あまっこ体力向上プラン」に基づいて体育の授業の充実やリズムジャンプの研修を行った。 (5)各学年の発達段階や各教科の特性に応じて、積極的なICTの活用を進めた。	(1)夏季休業中に研究会を持ち、PDCAで単元を見直すことができた。中学との合同研修を行い、各教科でのICTの活用の情報交換を行うことができた。 (2)特別支援学級担任と交流学級担任の連携がよりいっそう進み、教職員、児童ともに多様性の理解と共生社会に向けての意識が高まった。障害理解のためのカリキュラムをつくり実施することができた。下小スタンダードを徹底することにより、児童が見通しをもって学習に取り組むことができている。 (4)全国体力テストの結果では、一定の体力の維持と向上が見られた。 (5)様々な学習場面でICTを活用することができた。	(1)今後、あまっ子ステップアップ調査の結果を生かし、今年度中に行うこと、来年度に向けて必要なことの整理を行う。 (2)就学前機関との引継ぎを丁寧に行い、1、2年生段階での支援を充実させる。 (4)指導補助員の事業を活用し、日々の指導の充実を図るとともに、リズムジャンプの実施を進める。 (5)探究的な学びの実現に向けて活用の工夫を行う。	

2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
(1) 基本的な生活習慣確立の取組を促進し、心身共に健全な育成を図る (2) 道徳性育成の取組を促進し、多様性を受容し、思いやりで満たした人間関係及び社会とのかかわりづくりに努める (3) 各校のいじめ防止基本方針に基づき、誰もが安全・安心して過ごすことができる学校の環境づくりに努める (4) キャリア教育の取組を促進し、社会的自立に必要な能力を育成を図る (5) 不登校にならないようにするための学校づくりを進めるとともに、不登校児童生徒の学習環境の確保や家庭への支援に努める		3.1	3
取組	成果	課題と改善策	
(2)人権週間を中心とする取組を充実させた。昨年度まで6年生を対象に実施していた性の多様性の理解の学習を今年度は2、4、6年生で実施した。 (3)(5)アセス(学校環境適応感尺度)の読み取りと活用についての研修会を行った。毎月、いじめ対策委員会と生徒指導委員会を開催し、いじめや問題行動の未然防止・早期発見や、不登校の対応に努めた。不登校児童の保護者との連絡を重ね、本人・保護者の支援を行った。	(2)性の多様性の理解の学習を2、4、6年生で実施することにより、発達段階に応じた理解や気づきを促すことができた。 (3)(5)登校しにくい児童の居場所を保健室に置いて養護教諭がキーパーソンとなることにより、登校しやすい環境づくりができた。	(2)今年度に引き続き2、4、6年生で性の多様性の学習を実施することにより、すべての児童が発達段階に応じた学習をくりかえし受けることができる体制を作る。 (3)(5)学生ボランティアや各学年の教員が連携して、保健室を中心とした不登校支援を組織で取り組む体制を作る。	

		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
3 家庭・地域・学校の連携を深め、活力に満ちた学校園づくりに取り組む			
(1) 教職員の資質向上の取組を促進し、業務改善を進めながら学校の組織力及び教育水準の向上を図る (2) 学校と地域との連携・協働を推進し、地域とともにある学校づくりに努める		3.3	3.5
取組	成果	課題と改善策	
(1)運営委員会と研究部を中心とした校内組織を機能させることにより、OJTでの資質向上と組織におけるミドルリーダーの育成に取り組む、チームとしての対応力の向上に取り組んだ。 (2)学校運営協議会を開催し、コミュニティ・スクールとしての取り組みを進めた。また、総合的な学習を中心にカリキュラムマネジメントを行い、地域の方々の協力を得たり市内から広くゲストティーチャーを招いたりして、開かれた教育課程の実現を進めた。また、学校だよりやHPを活用して、学校の様子を広く発信した。	(1)ミドルリーダー研修を3回実施し、中堅教員の意識向上を図ることができた。校内研究を中心として若手教員の授業力向上を図ることができた。 (2)学校運営協議会を年5回開催した。また、今年度は大近松祭への出演、園田学園女子大学の近松研究所や国立文楽劇場の見学など、近松郷土学習をさらに広げることができた。	(1)今後も、若手教員が中堅教員の支援を受けながら、積極的に校務における役割を果たすことができる環境を作る。 (2)学校と地域との連携をより一層進めながら、コミュニティ・スクールとしての取組を地域に発信していく。	

		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る			
(1) 安全教育的取組を促進し、登下校及び学校園内の安全確保を図る (2) 防災教育的取組を促進し、危機管理能力の向上を図る		3	3
取組	成果	課題と改善策	
(1)保護者や地域の方の協力を得て登校時の見守りを行った。また校外児童会と集団下校の機会を設け児童の安全意識の向上を図った。定期的に校内の安全点検を行い危険箇所については校務員による修繕を行った。 (2)火災、集中豪雨、地震、津波を想定した避難訓練を実施し、危機対応力の向上に取り組んだ。今年度は、休み時間に火災を想定した避難訓練を実施した。	(1)保護者や地域の方の協力を得ることで児童の安全が確保できている。校舎の老朽化のため、修繕箇所は多いが、その都度対応することができている。 (2)休み時間に行った避難訓練では、今までの経験を生かして迅速に避難することができた。児童の防災意識や対応力を育むことができた。	(1)校内でのけがが目立つため、遊び方についての指導の徹底を図る。 (2)今後も様々な機会を想定した訓練を行い、児童の対応力を高める取り組みを行う。	

教育目標		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
		3.1	3
(1) 教育目標の達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 教育目標の具現化と指導の充実			
取組	成果	課題と改善策	
教育目標・めざす子ども像 「よい社会の実現に向かって、夢や希望を持ち挑戦する児童の育成」 ・夢や目標に向かって、最後まであきらめずにやりぬく子……がんばる ・思いやりをもったやさしい子なかよく…なかよく ・たくましく健康で強い心を持つ子……つよく (1)教育目標の達成に向け、学年目標、学級目標、研究テーマを設定し、教育活動全体で計画的で具体的な取組を行った。 コロナ禍ではあったが、前年度までの知見を活かし最大限実現可能な取組を行った。 (2)「自ら学びを探究し、よりよい社会を創りだす子の育成」のテーマで研究に取り組んだ。	各学年の学習活動、学校行事、研究等、教育活動全体で取り組み、行事や朝会などで形を変えつつも繰り返し伝えることにより、教職員も児童も「夢や希望に向かって挑戦する」「よりよい社会を創りだす子」を意識して取り組むことができた。	保護者に実施した学校活性化アンケートでは、「気になることを学校に相談している」「自主学習などの宿題以外の学習に取り組ませている」の項目が課題となった。保護者が相談しやすい体制づくりや自主学習等の推進の取り組みを行っていく。	

研究テーマ		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
		3.2	3.5
(1) 研究テーマの達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 研究テーマの具現化と指導の充実			
取組	成果	課題と改善策	
研究テーマ 「自ら学びを探究し、よりよい社会を創りだす子の育成」 ～近松郷土学習や多教科にわたって学び広げる授業の創造～ (1)今年度は3年計画の3年次として、昨年度までの研究の積み上げの上に立ち、育てたい資質能力の育成のための単元開発に取り組んだ。 (2)生活科・総合的な学習と関連させ、外部の人材を活用しながら、カリキュラム・マネジメントに取り組んだ。	(1)前年度までに開発した単元を参考にしながら、各学年のねらいや育てたい資質能力が発揮できるような単元開発を進めることができた。 (2)地域人材や市職員、専門家等をゲストティーチャーに招きながら、国語・社会・理科等他教科と関連付けながらカリキュラム・マネジメントを進めることができた。	研究は今年度が3年計画の3年次となった。次年度以降は、さらに各教科における「探究的な学び」の実現に向けて、各方面からのアドバイスを受けながら方向性を定めて取り組みを進めていく。	